

【第一部】基調講演

鷲田 清一 京都市立芸術大学学長

～レジリエントな都市とは？～

まちに地力があるというのはどういうことだろうか。まちに地域としての力がなくなってきたとき、あるいは経済不況、人口構成の変化、災害などでその力が落ちてきたとき、それを手直しし、元の力を取り戻し、さらにはいつその活性を生みだしてゆく力を、最近《レジリエンス》と言うらしい。

東日本大震災は、東北における津浪被災とは別に、東京をはじめとする大都市が、じつは「地方」社会以上に脆いということを思い知らせた。流通・交通から配水・送電まで、社会の公共システムが停止したら、生活がすぐに破綻してしまうのだから。

その理由は明白である。人は独りでは生きられない。出産から保育、看病、介護、看取りまで、あるいは食材の調達から排泄物処理、防災まで、それらのどれ一つとして他人との協働なしには営めない。そういう相互扶助のしくみ、言ってみれば《いのちの世話》を、わたしたちはこれまで地域社会から社会システムへと急速に移してきた。「福祉」や「公共事業」の名で、行政の公共サービスに、あるいは民間企業のサービス業務に、税金または料金を支払って委託するようになったのだ。そのことで《いのちの世話》のクオリティはずいぶん向上したが、それとともに人びとは社会の（主ではなく）顧客に成り下がっていった。サービスを購入する、そんなぶら下がり社会に安穏と生きることになった。システムにぶら下がるばかりで、じぶんたちの抱える問題はじぶんたちで解決するという能力を失っていったのだ。

東日本大震災は、そのことを都市部であらわにした。いざというとき、万が一社会のサービス・システムが破綻しても、どこかからだれかの手がずっと出てくる、そんな地域生活の地力、それをどう取り戻すかという問いを、人びとに突きつけたのだった。

ところで、アニメーション映画には、〈近景〉〈中景〉〈遠景〉と、奥行きに三つの次元があるという。それを社会にあてはめると、〈近景〉は個人あるいは家族の生活、〈遠景〉は社会一般あるいは国際社会、そして〈中景〉は職場や地域のコミュニティということになる。昨今、この〈中景〉がずいぶん痩せ細ってきている。そういう「中景」の痩せ細りは、先にも述べた「市民」の「顧客」（消費者）化ということにある。そのおまかせマインドとでもいうべきものが、地域の地力を衰弱させてきた。それに対してわたしたちは、いま、自分たちの手で地域社会の、ひいては日本社会のさまざまな問題解決のためのコンテクストを作ってゆく力を養うことを求められている。これこそ《レジリエンス》の名で迫られている市民の課題である。そして、いま地方に移住する若者たちは体を張ってその解決の方法を模索している。

これにあたっては、さしあたって二つの姿勢が肝要だと思われる。

一つは、現在の関心から未来を見るのではなく、逆に未来のほうから現在を見る、そのようなまなざしをもつことである。じっさい、明治期の「富国強兵」、戦後復興から高度成長、さらに高度消費、バブル景気と、この150年ほどのあいだ、日本社会はいつも右肩上がりの軌跡を描いてきた。右肩上がりの世代には、どんな深刻な問題も技術の進歩によって次

の時代には解決されるという感覚が骨の髄まで染み込んでいる。そういう世代の課題は一にも二にも前世代を乗り越えるということであり、自分たちの欲望をつねに未来に投影するということから、未来の世代のために蓄えたり節制したりということをする必要を感じないのである。とどのつまり、未来世代を憂うことのもっとも少ない世代だということである。これに対して重要なのは、未来世代からの視線に身をさらすことである。

その一例を挙げる。宮本常一は『庶民の発見』のなかで、瀬戸内で出会ったある石工のこんな言葉を引いている――

「あとから来たものが他の家の田の石垣をつくとき、やっぱり粗末なことはできないものである。まえに仕事にきたものがザツな仕事をしておくと、こちらもついザツな仕事をする」。だから、将来、おなじ職工の眼にふれたときに恥ずかしくないような仕事をしておきたい……」

そして、職人のこだわりはじつに未来の職人に宛てられていた。目先の利害ではなく。何十年先の世代に見られても恥ずかしくない仕事を、というこうした自負をもって、仕事をする人がめったに出会えなくなったというのである。いま何をしておくべきかと考えるとき、未来のほうから現在をまなざす、そのような視線が必要だということである。

いま一つは、普段できないことは、緊急のときはなおのことできないということである。

先に見たように、大震災のとき、大都市の人びとは、生活をゼロから立てなおそうにも知恵も技もまるで持ち合わせないことを思い知らされる。市民の能力喪失が一挙に顕在化する。それは、食材やエネルギー源といった日々の生活の基盤をみずからの手で担い、手当てし、修復もするそんな習慣を放棄し、国家や市場が提供するシステムに委ねるようになったからであった。わたしたちはいま、そういう文明のかたちを根本から問い質すことを迫られている。

そのとき重要なのは、普段からの手入れと手直しである。完全な制度というものはない。今日ではあたりまえに見える制度も、きしみやひび割れ、腐蝕や破綻を未然に防いでおこうという、無名の人びとによる日々の丹念な手入れと手当てとによって持ち堪えてきた。中島岳志の言葉を借りれば、だから、「劇的な解決を望むのではなく、部品を点検しボルトを締め直すように、一つ一つの問題に向き合うしかない」。

こうして、「レジリエントな都市」とはどういうものかということもおぼろげながら見えてくる。ここでも二つ、挙げておく。

その一つは、そこに「語り継ぎ」の慣わしがしっかりと根づいているということである。忘れたいこと、忘れなければならないことは、たしかにある。けれども人には、忘れるという「自然」に抗ってでも忘れてはならないことがある。凄絶な被災や事故、そして戦争。二度と悲惨な経験を繰り返さないよう、想像力を駆使して憶えつづけなければならないことが。そのような想像力を保ちつづけるためにいろんな補助線を引いてくれるのが、人びとの「語り継ぎ」である。それはなかなか難しい。だからいろんな工夫、いろんな装置が要る。物語や言い伝えがそうだが、もう一つ、記念祭というものもある。京都でいえば、祇園祭の興りは、貞観十一年（863）年の御霊会である。

いま一つは、レジリエントな都市とは、オルタナティブ（選択肢）がいっぱい用意されているまちだということである。危機のときに大事なことは、危機を招くことになった文

化・文明のあり方に対して、それとは根本的に異なる（物事への）処し方をどれだけ提示できるかということである。そのためには日頃から、「百年の計」をすらはるかに超えて生きる〈学術〉〈技術〉〈芸術〉の発想を育んでおかねばならない。それこそ真に「文化資源」といえるものである。文化はけっして添え物や飾り物なのではない。会話の作法、ものづくりのこだわり、デザインのセンスから、経営・企業なりわいの精神、行政・市民自治・近所づきあいのスタイル、料理の味つけ、住まいの工夫、信心のあり方まで、日々の暮らしと生業とを支えているものである。それはつまり、それぞれの地域に固有の〈価値の遠近法〉だと言いかえてもよい。だから、文化の「掘出し物」が資源としてたっぷりあるまち、ときにやんちゃも変人も許す容量をもつまちこそ、レジリエントだといえる。

まなびや学舎、とくに大学は、社会実験と未来に選択肢を数多く提示できる知的資源である。京都が幕末の戦乱とその後の遷都のあとの荒廃にあって、まず取りかかったのが番組小学校の設置であった。危機にあって、目先の利や繁栄ではなく、次世代育成を、人的資源の蓄えをまずは図ったのである。そういう意味で、若い人が大事にされるまちはレジリエントだといえる。

(要約)